



第58号

平成17年(2005)

1月16日発行

(年4回発行)

私の連句採点法

青木秀樹

十一月十四日(日)にかねてより念願であった明雅先生のお墓参りを、会員四十名で果たすことができた。ふだん先生がそばに居てくださるような気分でしたが、墓前に立つと先生とお別れしたことを実感させられた。

その前日十三日(土)は福岡県苅田町の国民文化祭連句大会。地元の方々のご努力の成果で大会は盛況であった。国民文化祭への参加はまず募吟に応じて作品を応募する、当日の連句大会に参加するという二段階があるが、今回は作品応募数七百六十巻という多数にのぼった。選者を務めた私のところに届いた作品は作者名がマスクされたもので、宅配便は重量三・六kgであった。

最近連句協会において「連句は座の文芸であるから選奨には向かない」という理由で、

国民文化祭での選奨をやめるべきだと主張する幹部がいる。しかし各連句結社・グループが集る理事会においては「募吟選奨は励みになるから続けるべし」という意見が大勢を占めている。主催者である開催の実行委員会が大会を盛況下で終わらせることを念じている。自分たちの作品が他人から認められることは励みになる。特に、上位入賞者よりも初心者の入選の喜びは大きい。

さて選者としての私の選考基準は明雅先生の「私の連句採点法」(『季刊連句』第二号)に基づく。即ち連句作品の文学性を①一句一句のおもしろさ、②前句と付け句の付け心付け味のおもしろさ、③三句目の転じのおもしろさ、④一卷全体の序・破・急のおもしろさからみるということである。とは言え、七百六十巻の作品は多すぎる。予選をしてレベルの低い作品をふるい落とすことになる。私の場合、今回はキズ三箇所で失格、すなわち3アウト方式を用いた。各流・各派が用いている式目が微妙に異なるので、それに配慮するためであったが、一方キズだらけの作品を、いかに部分が優れていても入選させられないとの私の考えでもあった。

発句の当季違反は論外で即刻アウト。意味不明句、季戻り、春秋の句数、恋句の句数、同字三句去りやその他の去り嫌いの違反などをチェックしたが、重点は前句との付け味、

打越との転じであり、その点は丁寧に吟味した。付け味の悪い句や三句がらみなど違和感を抱かせるものもなんとも多い。予選を終えると、七百六十巻が七十三巻に減っていた。初心者や独学で、連句の基本をマスターしていない人がいかに多いかを知らされた。

その予選通過作品を詳しく読み、作品の優劣をつけるわけであるが、準決勝で予選通過作品を上・中・下に分け、決勝は上から順に序列をつけた。私は、一卷全体の变化、序・破・急の構成、重たい句と軽い句のリズム・メリハリを重視した。一卷のテストとしては俳諧味を重くみた。

選者を引き受けるに当たり、自分の選が他の選者とかげ離れることを懸念したが、幸いにも入選作品として選んだ三十巻のうち十九巻までが他の選者との共選となった。明雅先生の連句採点法は有益であった。なお、結果的に同じ式目に基づく猫養会員捌きの作品を十三巻選んでいた。

最近猫養会の中で式目に関する論議があるが、会員であるかぎり猫養の式目を守ることが当然である。うっかり間違えた場合は直せばよい。一方、そもそも式目が何のためにあるかの原点を考えると、式目に適っていれば良い作品になるかといえば答えはノーである。文芸作品としての水準を高めるべく、新しい付け味のある句、新鮮な感動を与える作品を追及してほしいと願っている。

明雅先生のふるさとへ 佛淵健悟

十一月十三日、福岡県苅田町での国民文化祭連句大会の閉会式後、猫養会からの参加者一同バスに乗り、去年八十八で亡くなられた東明雅先生の眠る菩提寺のある熊本市へと向かいました。

もう逢へぬ師を訪ふ旅や夕落暉

路子

福岡から一路九州自動車道を南下する西側のパノラマはゆつくりと夕焼けて、初めての墓参に皆さんそれぞれの思いにひたつておられたようでした。参加者は青木猫養会長以下四十名。名古屋の桃雅会、豊田のころも連句会からも参加されました。熊本がご郷里の倉本路子さんには、大人数の宿泊・交通手段の手配など大変お世話になりました。

宿泊場所の厚生年金会館ウエルシテイ熊本は熊本城の近くにあり、ライトアップされたお城の見える部屋で、その日は夜遅くまで連句された方も多かったようです。私は気持ち昂ぶっていたのか、朝は五時に起きてしまいました。朝食前、熊本城の方に散歩してみました。城に近づくにつれ、武者返しなど戦上手の加藤清正普請の実質堅牢のイメージに加え、非常な美に打たれました。明雅先生を何かにつけ「ひごもっこす」に結び付けた

ものですが、こういう場所に立ちますと、つくづく「もののふの裔」という言葉に実感が湧きました。

十四日午前十時、四十名の参加者は先生の眠る墓所に赴きました。菩提寺の浄土宗往生院は熊本市池田町一丁目にあります。

十時半より本堂で、「東先生の一周忌慰霊祭としてお勤め致します」とご住職より心のこもったご法要を頂きました。ご法話の中で、「戒名の西峯院蘇揚明雅居士は普通は呉音で「みようが」とお読みするところですが、皆様の親しんでおられた「めいが」と読ませて頂きます」と、明雅先生の追悼集などもよく目を通しておられ、安堵致したことでした。

ご法要の後広間に移り、富山から参加された二村文人さんの献杯でお斎を頂きつつ、一番のご供養と表合十句を楽しませて頂きました。文人さんの「大勢さんで明雅先生も喜んでらっしゃるとどなたかお声がありました。私は明雅先生恥しがってると思います」とのご挨拶に皆さん和みました。短い時間でしたが、沢山の思いを残して先生の菩提寺を後に致しました。

芭蕉さんは、「四国の山ぶみ・つくしの船路、いまだにこゝろさだめず候」と「奥の細道」の翌年正月荷笥宛の手紙で述べ、つくし（九州）への旅は心を揺さぶったテーマであったことをうかがわせます。

先師の思いをなぞるように、弟子たちは盛んに九州に旅をしました。「奥の細道」の同行者曾良は、「ことしわれ乞食やめても筑紫かな」と詠み六十二歳の時九州に入り、壱岐で客死しました。芭蕉没後十七年後のことです。

さて芭蕉さんには「吸物は先出来されしすいぜんじ」という付句が「猿蓑」の中にあります。立派な膳の吸い物に出た水前寺海苔を賞でた付ですが、この海苔は熊本城からほど遠からぬ水前寺の清流に育つ特産品で、何か思いもかけないところで芭蕉さんと明雅先生に繋がりがあのような、いつも不思議な思いの湧く付句です。

明雅先生が昭和五十八年「季刊連句」を創刊された時の「発刊の辞」のご文章が思い出されます。

「庶民の文芸であり、座の文芸である連句に、芭蕉以来の不易の格を守りながら、現代の流行に即した新しみを求め、万人の琴線にひびく作品を創り出すのが、私どもの究極の願いである。その実現は極めて難しいに違いないけれども、先師（芦丈翁）九十の時のあの沸々とたぎる雄心を鑑として、いつの日か民衆の新しい真の文芸として認められる大輪の美しい花を咲かせたいと思う」。

芭蕉の夢、明雅先生、そして私たちの夢が、熱く交錯するような、そんな眩暈となつかしさを感じながらの熊本への墓参でした。

明雅先生追善

表合十句

平成十六年十一月十四日首尾

於 熊本市 往生院

「やあやあと」

青木秀樹

やあやあと師の現れさうな肥後小春

青木 秀樹

猫慕ひ寄る紅葉散る道

原田 千町

また一人呑み食ひ語る友できて

二村 文人

汗を絞って計る体重

松原 弘子



月渡るチアリーダーは髪長く

松本 碧

林檎の香る君のささやき

生田日常義

城壁にいほむしり斧構へをり

梅田 實

幣を捧げて欄宜はぬかづく

峯田 政志

読み耽る漱石全集花万朵

山本 要子

路面電車の走るのどけさ

青木 泉子

「もっこすの城」

佛淵健悟

孟冬のもっこすの城仰ぎけり

鈴木 了齋

鶴渡り来る東の空

木村 真呂

よう歌ひよう笑うてはよう飲みて

杉山 壽子

後の裕の裾乱れつつ

式田 恭子

くちづけは霧のとばりに包まるる

上月 淳子

夜毎に太る中天の月

倉本 路子

金魚鉢住宅難のご時勢に

武村 利子

みな腹這ひで指圧灸など

山口 良子

若者の撥は器用な花太鼓

根津 美紗

詞華集を措く耕の頃

佛淵 健悟

「枇杷の花」

坂本孝子

しみじみと肥後に来てをり枇杷の花

坂本 孝子

碩台小の鉄棒の冷え

鈴木千恵子

バスデー母の手造りケーキにて

横山 わこ

レースの衿に色香ただよふ

中田あかり

月光に慕はしとあり男文字

鈴木美奈子

秋の山河を越えし猫バス

松島アンズ

呐々のご法話を聞く冬隣

長崎 和代

新千円札酒買ひにやる

吉村あみこ

花吹雪なほ目裏に消え難く

梅田 利子

港の丘に満つる囀

棚町 未悠

「肥後の天」

橘文子

倂や鶴舞ひ来る肥後の天

橘 文子

黄の鮮やかに香る文旦

久保田庸子

ミュージカルスペシャルシート予約して

篠原 達子

じゃじゃ馬の手に絹の絵扇

繁原 敏女

慕ひ寄る海彦山彦月読も

谷本 守枝

新酒に酔へば夢果てしなく

長坂 節子

道おしへ待つ産土の小学校

加藤 治子

鑿の誇りを伝ふ重代

竹内たつ子

石垣の続く限りの花万朵

市野沢弘子

お玉杓子の生るる水あり

内田 麻子

第二十五回俳諧芭蕉忌

次第 役割

一 席改め	宗匠 副島久美子
二 席入り	脇宗匠 倉本 路子
三 配硯	副宗匠 近藤 守男
四 献花	執筆 高橋 豊美
五 執筆呼び出し	知司 林 鐵男
六 文台捌き	副知司 根津 忠史
七 俳諧興行	座配 棚町 未悠
八 花前	座見 松島アンス
九 献香	花司 鈴木千恵子
十 花の句披露	香元 佐古 英子
十一 端作り	配硯 式田 恭子
十二 吟声	同 山本 要子
十三 文台返し	同 横山 わこ
十四 作品奉納	老長 原田 千町
十五 納硯	
十六 挨拶	
十七 退席	

平成十六年十月二十日
於江東区芭蕉記念館

脇起二十韻
「住つかぬ」 副島久美子捌

住つかぬ旅のこころや置火燵	翁
テレビ画面に初鶴の群	秀樹
分水嶺こだまとなれる石ありて	千町
手足を洗ふわきの小流れ	碧
ヅリーグピッチの芝を月照らす	路子
金木犀の香る近道	忠史
しつぽりとお物語の土瓶蒸	鐵男
口づけといふオールマイティー	未悠
大使館ビザ書替への長い列	守男
駱駝追ひ抜く中古自転車	常義
捕虫網執帯亜種の混じり込み	英子
納涼映画月も観客	實
ドラキュラの流し目に我とろけたる	わこ
酔つた勢ひどうにでもして	千恵子
印ひとつ押せばこの家他人のもの	要子
八十八ヶ所ひびく鈴の音	恭子
シルバールパス割引効かぬ小金持	アンス
ムツゴロウ等の穴に見る夢	一枝
糸ざくら此処まで届け花席	久美子
薄墨匂ふ春のゆふべに	執筆

平成十六年十月二十日首尾

東明雅先生一周忌追善興行 生田日常義

二〇〇四年十月二十日、台風23号関東接近の風雨のなか、東明雅先生一周忌追善興行は施行された。当日は猫衰会定例の芭蕉忌正式俳諧に引き続き、東明雅先生への献花、そして明雅先生発句の脇起り二十韻興行、と順次無事施行された。

正式俳諧から献花、そして俳諧興行への設営転換などややこしいところもあったが、当番幹事はじめ参加の会員各位の自発的な心遣いが随所にあり、思いのほかスムーズにそれぞれの会場雰囲気自然と整えられていった。

参加の方々も七十二名(当初予定)という空前の参加人数で、運営をお手伝いする者としては、あの狭い会場で、この人数を滞りなくさばいて設営の転換と次第を進めるのは少々不安があつたが、案ずるよりは産むが易し。

参加者はどこの誰とも知れぬ有象無象ではなく、明雅先生の遺徳を偲ぼうという一心の方々ばかりであつたので、つまり心がひとつになつていたので、何の問題もなく諸事が進んだのである。

最後に、猫衰会にとり明雅先生は特別に大切な存在であり、追善連句興行は遺志を我々が継いで行くという意味で極めて重要である。意味合いの異なる芭蕉忌正式俳諧開催日は別に設けることが、今後の課題であらう。

明雅忌興行脇起二十韻

「雁渡し」

内田麻子捌

実朝の伊豆の大海雁渡し

明雅仏

二夜の月をめづる岩風呂

麻子

今年絹即売会の賑はひて

かりん

ハモニカを吹く少年の眉

守男

自転車の無銭旅行を計画す

靖子

列島縦断君の待つ町

啓子

初恋を貫くドラマに熱くなり

ん

濡れ煎が好きテレビ見るとき

靖

蛭有りますそんな張り紙広漢堂

ん

くつろいで居る僧のすててこ

男

高原の鐘を鳴らせり同級会

啓

オイル相場の上げとどまらず

男

あん畜生と綺麗な姉がゐなくなり

啓

ばついち男と角巻の中

靖

坪庭に月皎々と雪見酒

啓

弾かないピアノ残る故郷

靖

父母の明治の写真色褪せぬ

麻

滑舌法の響くうららか

男

花冷えのオフィスの街はひそやかに

ん

重なり合ひて眠る仔猫等

靖

連衆 登坂かりん 近藤守男 関口靖子

小池啓子

「像の翁」

上月淳子捌

物言はぬ像の翁や秋の風

明雅仏

もみぢかつ散る淡き昼月

淳子

鳥渡る異境を目指す舳に立ちて

士郎

チヨコボンボンを探るポケット

郁子

教会のバザーのピンゴ賑やかに

アンズ

子等と一緒に歌ふ賛美歌

碧

流眊の素敵な彼に気もそぞろ

郁

心楽しく破る付け文

郎

屋台から成り上りたるラーメン屋

ズ

熊の散歩は町へ町へと

郎

共存は難しいのか人も世も

碧

しどろもどろの答弁に野次

ズ

ベツカムのスキンヘッドはふじ額

碧

ビールの酔ひにあとは知らない

郁

月皓々雄滝は雲を払ひつつ

碧

旅に出づればきつと買ふ杖

郁

イラクからイランへ抜けてこともなし

郎

どこでもドアうららかに開く

ズ

百年の先の我が家も花香れ

郎

夢に見し蝶結界を越す

碧

連衆 横井士郎 東 郁子 松島アンズ

松本 碧

「水の秋」

梅田利子捌

水の秋昔深川橋幾つ

明雅仏

二夜の月に浮かぶ曳舟

利子

つぎつぎに紅鮭の山捌きゐて

有子

広さを村のもてなしとする

了斎

新任の教師に児らの群がりて

冬乃

何故かモテない人気者なの

千寿子

色付きのハート印のeメール

久美子

いきなり増えた引落額

斎

雪達磨少し笑顔にしませうか

有

女関にゐる熊にびっくり

久

市町村合併名称もめにもめ

乃

平家の末裔みんな面長

同

女一人結界の身に月涼し

久

心は遙か空蟬の恋

有

汝が袖を衣桁に掛けていとほしむ

斎

良き方角へ決まる引越し

斎

富士裾野ラッピンングバスゆつくりと

久

さらさら光る凍解の湖

斎

平成の風狂花も共に舞ひ

利

やあやあと言ふ声ののどらか

寿

連衆 佐々木有子 鈴木了斎 百武冬乃

紺野千寿子 副島久美子

「休肝日」

豊田好敏捌

「夜長かな」

篠原達子捌

「馬面」

橘文子捌

松茸が膳に香るよ休肝日

明雅仏

肝臓をだましつつ酌む夜長かな

明雅仏

懐かしや殿様バツタの馬面も

明雅仏

新酒三本窓越の月

好敏

名残の月に偲ぶ面影

達子

ひようと鳴らしてみたるひよんの実

ブランドのファッション案山子目立ちあて

昌子

丘の上までとどく潮騒

将義

月の窓位相解析進むらん

文子

総革張りにしたいマイカー

恭子

田周率暗記比べの六年生

丁那

鉛筆に凝り消しゴムに凝り

美奈子

何かも話せる仲間と集ひたり

ふみ

そばかすの子のお下げ引っぱり

未悠

新メニュー卵料理の腕試し

豊美

男の背中生きた昭和史

一郎

ウイルスに恋のメールが感染し

那

TGVは青野駆け行く

一枝

カタカナの多き恋文出しそびれ

佐紀子

クレムリンには鯨棲みつく

義

夏館噂の元は巴里雀

奈

夜回りついでに寄るは別宅

昌

柔道の黒帯ふえる警視庁

悠

おひとりさまをやつと返上

奈

雪降れば駅前演説むなしくて

恭

耳にやさしき畳掃く音

悠

職場では欠くべからざる癒し役

奈

のそりと歩くぶちの大猫

み

大きな鍋に雑魚が炊かれて

悠

酔ひの回った不動明王

美

氏よりも育ちといふは詭弁なり

敏

キリシタン五島列島ひっそりと

悠

世態人情六双屏風に活写され

枝

親子二代が攻めるフセイン

郎

起重機の運転台に座す男

那

芝浜を聴く歳晩の月

奈

サーキットレースフラッグ血が騒ぎ

昌

溶けさうなまで雪女抱き

義

身ぐるみ脱ぎて注ぎ込みしはも

雅

麻のしわなど知らぬ抱擁

恭

月凍つる頭中将の嬰孕み

悠

吾が妻の重たきおんど抱きかね

同

月涼しすねたふりする鼻濁音

佐

国民栄誉賞は断る

義

ティンカーベルの透き通る羽

美

暗証番号またも忘れて

郎

花をゆく翁と杜国夢かとも

那

公魚釣りは爺に任せる

同

温泉と呆け封じ寺パツクです

恭

一丁前のあくび猫の仔

達

見るべきは見つ今生の花の色

文

花片をつけて戻りし傘たたむ

郎

春の虹まで自転車をこぐ

悠

風に乗り来る「春の祭典」

奈

絵手紙に描く赤きふらここ

佐

連衆 中野昌子 式田恭子 中村ふみ

古賀一郎 間佐紀子

連衆 川名将義 浅賀丁那 棚町未悠

連衆 武井雅子 鈴木美奈子 高橋豊美

西田一枝

「割箸と」

武村利子捌

「七部集」

青木秀樹捌

「割箸と」

吉村ゑみこ捌

割箸と語る楊枝の夜長かな

明雅仏

秋灯恋はさまざま七部集

明雅仏

割箸と語る楊枝の夜長かな

明雅仏

月の客人揃ふ顔触

利子

今様のギャル物思ふ月

秀樹

うるか舐めなめ二合半の月

ゑみこ

美術展模型の汽車を巡らせて

健悟

赤い羽根つける胸元息止めて

忠史

何処からかひよん吹く音の聞えきて

景翠

ボール遊びのひびく中庭

良彌

海から川へ上る魚達

壽子

学校帰り子らも集まり

わこ

海老蔵の襲名興行パリ沸かし

英子

酌み交はす僧と大工が席並べ

彌

燕尾服サンドイッチマンのひねる髭

政志

肩を抱きて流れゆく舟

富美

後継難はどこの世界も

弘子

黒木瞳に似た娘連れ

澄子

お互ひに片想ひなの十年目

珠枝

満塁にリリーフ投手打碎き

史

恋の歌ばかり諳んじゐる君よ

路子

外野の噂作りとて

英

氷河のかげら玻璃の器に

弘

清くおほらか万葉の頃

同

無邪気なるスター生まるる桜桃忌

悟

先生の書齋の軒に燕の子

彌

乾坤をふたつに裂きてはたた神

翠

麦酒の泡の卓にあふれる

美

ひと雨ごとに伸びる若竹

史

烏賊釣る人の灯を遠く見る

澄

町医者は白寿超すよと太鼓判

彌

浪速ではビリケン様に迎へられ

壽

あやしげな投資信託買ひあさり

わ

閉店決まりあがる売上

利

竜王戦はわしの勝ちやで

彌

曲がり角なり日本球界

路

泣きながら笑つてみせるアルルカン

彌

誘はれてそれなら共に暮らさうか

壽

傑物を生んだ久留米の教師どの

志

待ち呆け食ふ男らのイブ

悟

プラチナスタイル熟年の愛

彌

水曜の彼この嬰の親

同

ふはふはと押しくら饅頭冬の月

枝

月明かりざざ虫を取る爺の影

史

天窓の冬月覗く忍び逢ひ

翠

民話の里の洞のかたへに

美

ありつたけのもの重ね着をして

弘

顔見世興行上がる看板

わ

銭洗ふ弁天様は札が好き

枝

ITが何でそんなに儲かるの

彌

歳時記に載らぬライオン象パンダ

澄

車椅子から春を見つける

悟

からくり人形ちよつとつまづき

弘

エープリルフル老いの愉しみ

わ

通訳は富士より花を誉めそやし

英

花の城遠足の児ら抱へ込み

壽

石刻寝釈迦かげるふの中

ゑ

人影遠く風光る中

彌

春惜しみつつ開く弁当

弘

石刻寝釈迦かげるふの中

翠

連衆 佛淵健悟 佐藤良彌 佐古英子

村田富美 花巻珠枝

連衆 根津忠史 杉山壽子 八代 嫺

松原弘子

連衆 岩垂景翠 横山わこ 峯田政志

八角澄子 倉本路子

「大道無門」

島村暁巳捌

「虚実皮膜の」

青木泉水捌

「酒が命」

鈴木千恵子捌

俳諧の大道無門白桔梗

明雅仏

師の影踏まじ名苑の月

暁巳

さりたんぼ汁のお替りきりもなし

志げ子

嘯座でじつとテレビ見る猫

和代

こんな時なぜアラームが鳴り出すの

華蔵

観覧車にて長き接吻

要子

稀に来る文は理系の書体にて

蔵

球団新設もてるオーナー

げ

はたた神関八州をひと暴れ

代

青田の果てに小さき里山

蔵

はころびる合財袋旅なかば

代

片付け下手はいかな直らず

要

新婚はクローゼットでかくれんぼ

要

みてみぬふりの好いたらし奴

げ

冬至粥仕込む井戸端昼の月

蔵

熊の気持ちのわかる減量

げ

モノレール古刹の鐘を分けゆきて

代

屋並みの中をお遍路の列

蔵

墨堤の花浴び酒宴暮るるまで

げ

八朔柑をむいて差し出す

要

味はひは虚実皮膜の新酒かな

明雅仏

庵の猫のあるじ待つ月

泉水

爽やかに遠き山脈廻らせて

ゆみを

肩を組み合ひハミンクの子等

弘子

この辺の小町だったとパパは言ひ

鐵男

射止めるまでは多さをたつぷり

さえこ

埋み火に心の奥を封じ込め

弘

川向うから寒栴の音

男

カウチにてブライアパイプ磨き上げ

を

ブラックで飲むブルーマウンテン

弘

懸案の世界遺産を巡る旅

同

浄土めざして漕ぎ出す舟

を

月光の水母に似合う小夜曲

弘

触るれば甘い薔薇のくちびる

泉

ヨン様のあのほほえみを忘れな

弘

全財産をすって悔ひなし

男

民営化どこまでやるか小泉さん

こ

段々畑種を蒔く人

同

トラックをバギー疾走花の渦

男

夢は一炊かげろふの中

を

喉走る酒が命やちろ啼く

明雅仏

野山の色の見する荘厳

千恵子

右の翼月のまどかに浮かびゐて

千町

ぶ厚い書物ばらばらと読む

常義

撮りためしデジカメ写真整理中

三実

想ひ悩めり逢ひそめの頃

實

彼の膝あたし幸せごろにやーご

町

白いご飯におかかたつぷり

義

初ミサの鐘ひびき来る丘の街

町

重ね着をしてジョギングの人

義

散歩道金糸雀空に放ちやる

實

自由平等意外不自由

義

エコール・ド・パリを語る大画伯

町

男も替へて香水も替へ

三

素裕の肌に触れたき月の影

實

細身の杖で叩く石橋

義

経文を暗記する僧声高に

町

卒業の子ら夢の競演

同

旅視彼の日の花のよみがへる

千

海に向へば吹ける軟東風

實

連衆 蒲原志げ子 長崎和代 山田華蔵

山本要子

連衆 青島ゆみを 市野沢弘子 林 鐵男

難波さえこ

連衆 原田千町 生田日常義 滝沢三実

梅田 實

「源心コンクール」私論

東 明雅

そもそも、源心という連句形式（二十八句、四・十・十・四、二花二月）は、平成五年十一月、江戸川区行船公園内、源心庵での勉強会で、平素私が考えていた新しい連句を、主催者（源心の会）・場所に因んで源心と名づけ、この会にプレゼントしたものである。

昭和四十五年の連句復興以来、いろいろな人により、いろいろな連句の新形式が考えられ、発表されているが、その中で私が創始したのは二十韻（二十句、四・六・六・四・一花二月）とこの源心の二つである。

二十韻は半歌仙（十八句）より二句多いだけでありながら、結構、序・破・急を備え、いわば歌仙の完全なミニチュア版として、猫養以外の方々にも広く愛用されている。尤もこの二十韻という形式を始め発表したのは、昭和六十年の「季刊連句」第八号のことであるから、既に十七・八年経っており、その点発表して十年をそここの源心がまだあまり広まっていないのは、当然と言えば当然かも知れない。

周知の通り、現在でも万人が推賞する最高の連句形式は歌仙（三十六句）である。それは長すぎもせず、短かすぎもせず、初折オモテ（六句）、初折ウラ（十二句）、名残の折オモテ（十二句）、名残の折ウラ（六句）と均整

のとれた絶妙な配分、そして、その中に二花三月、序・破・急のリズムが潜められ、捌きも連衆も十分楽しんで、しかも飽きない工夫が凝らされているからである。

ただ、発句から揚句まで一卷三十六句を首尾するには、練達の捌き手でも、四時間乃至五時間必要だろうが、現代人にはこの時間的余裕が段々無くなっているのではあるまいか。

連句復興以来、新しい形式が次々に出現したのも、この時間の制約をいかに切り抜けるかによるもので、はつきり言って二十韻は二・三時間、源心は三・四時間の余裕がある場合を狙ったものであるが、二十韻が容易に受け入れられ広まって行ったのに、源心がなかなか広まらなかったのは、三時間という余裕は我々の現実生活の中に比較的生まれやすいし、二十韻は半歌仙にくらべ、形式的にすぐれていると考えられるのに対し、四時間という時間的余裕は中途半端で、現実にもあまりない上に、四時間でも無理すれば歌仙一卷が巻けるし、せつかく四時間で巻けるならばちゃんとした歌仙を巻きたいというのが大方の意見であろう。

しかし、折角の四時間をじっくり楽しむのなら、皆最も苦手とされる制約だらけの表六句の難関を四句で済まし、ウラとオオの二十句を丁々発止と存分に斬り結べたら、これが源心の最大の魅力ではあるまいか。

私は同じく私が作り出した二つの新しい連

句形式でありながら、いわば兄分の二十韻がひろく世に愛用されているのに対して、弟分の源心がいつまでも陽の当る場所に出られないでいるのに、ひそかに心を痛めていたが、今度の源心の会による「源心コンクール」の成功で、その良さが再確認され、多くのファンを生んだ事について、本当に嬉しいし、感謝申し上げます。

ただ、私はかねがね現在の連句界に不足しているのは、正当な批評精神と、信頼出来る連句批評家であり、引いてはその批評を可能ならしめる連衆心であると考え、それらが育つように努力して来た。

その点から言えば、コンクール（競演会）という形はどのように細心の注意を払っても光の反面には必ず陰を生ずる。コンクールという名にとらわれず、源心を募集して、それを批評するうまい方法はないものか、お礼とともに希望を申し上げる次第である。

猫養通信第四十八号より転載



初捌の頃

坂本孝子

A・C・Cに東明雅先生の連句教室が開設されると同時に、今は亡き秋元正江さんと私は駆け込むように入門した。お講義の内容は芭蕉の「七部集評釈」と「実作」であった。実作は、黒板で治定された句に宿題で一句を付け、葉書で先生に送り、先生はその全ての句に◎・○・△の印を付け、その理由を懇切に書いたコピーを次のお教室で配布解説の後、また付句を皆で考えるところという形のお授業であった。その三段階評価のトラウマは今も私の中に強く潜んでいる。

明雅門で最初に捌をしたのは正江さんだった。神奈川県大山の阿夫利神社で都心連句会の正式俳諧が奉納され、その見学の後、連衆は明雅・徒司・K・K夫人・孝子・他。流石の正江さんも緊張で最初は少々気分がすぐれない様だったが、終わってみればこんなに充実して面白い経験は初めてだと感想をもらしていたのを覚えている。

さて私の初捌は何しろ四半世紀も前のことなので、年月日や場所などはほとんど思い出すことができない。前述の正江さんよりやや遅く、都内の大きな会場で、村野夏男（わだとしお）氏が司会をしていらした？連衆は明雅・徒司・正江・他。心臓が飛び出しそうにドキドキして、折角の豪華弁当にほとんど箸も付けられなかった。芭蕉七部集以外、現代連句の作品など殆ど読んだこともなかったから

教室で習った通りの物差しで何とか首尾。披稿の時「初めての捌で・・」と申しましたところ、司会者からは「初めてにしては大変良く出来たが、もっと暴れて面白くしたほうが良い」との批評を頂いた。

振り返ってみるとその頃の私は、連句と言えども俳句としても優れた句しか好まず、川柳や冗談、洒落などは区別するべきものと決めていたような気がする。日常的なおかしみの中にある上等のペーソスを手にすることも知らぬまま。明雅先生の「夜店のステッキ」が見えてきたのはつい最近のことなのである。

わが初捌きの記

水谷紀明

「捌く」といふは、神ならぬ身で他人様がせつかく拵へた句に打越がどうの、付け味がかうのと注文を付けた挙句採つたり棄てたりする、やな行為であります。あまつさえ練達の連衆に囲まれてこれをやるのは、初心者にとつてかなり辛い試金石と言えませう。

私に初めてお鉢が廻つてきたのは連句の扉を叩いて間もない頃。それまで句会にも何度か出席し、先輩方が慣れた呼吸で当意即妙に捌いてゆく様子は見てゐたのですが、いざ自分がなると、目先の一句を作ることに汲々としてゐた私は突然のご指名に舞い上がつてしまひました。

「ま、いいから一度やつてご覧なね。もの

は試し」と促され、それでは、と受けたのはいいけれど、いちどにどつと場に出て来た句の中では、果たして前句にいちばんしつくりくするのはどれかしらん、季は合つてゐるだらうか、打越になつてはゐないか、前に同じやうな言葉が出てゐなかつたか、全体のバランスは、などと込入つた要素にアタマを絞りながら捌かなくてはなりません。また、さういふ具合にうまく捌いたつもりでも、厳しさと優しさの入り混つたアドバイスが都度連衆から飛んで来る。それらは一々納得の意見ではあるのですが、一応は自分なりの持ち味も浸出させなくてはなりません。駆出し芸人の謙虚さもあらばこそ、思はず見せた粘り腰でした。

かうしてなんとか半歌仙が巻き上がれば、つぎは校合です。またもや先達に教えを請ひ、蟻螂の斧の如き抵抗を試みながらではありましたが、この作業で、一卷に通底する気分の大切さ、付けの微妙な味はひや転じの面白さ、などなど大いに勉強になりました。

この時の作品が、後日「全国連句新庄大会」で渋谷道先生のお目に止まり、あらうことか「優秀作品 入選」の榮に浴してしまひました。選評に「のびのびと付け進む連衆の呼吸が伝はります」とありましたが、あの句座を包んでゐた空気はまさにそのやうであつたと思ひます。

この先迷ひ迷ひしながらも長く付き合つてゆければと思つてゐます。

一つの読み

権頭和弥

昔、大宮郷（秩父）松本幽雪宅（当時忍藩大宮郷総名主）で歌仙が巻かれた。

芭蕉が没して四年の年月が経っている元禄十一年（一九六八）戊寅春・即興とある。この地でも蕉風俳諧が育ちつつ浸透している事が解る。

出羽不覚の紀行文「入間川やらずの雨」（元禄十五年刊）等からも、忍藩全般に俳諧が盛んであった様子が伺え、歴史的にも読み解きにも興味があるので（郷土の作品でもあるので）表六句を取り上げ眺めてみることにしたい。

屠蘇酒や土器焼も祝はるる 軒水
 客人もてなせ庭に咲く梅 柳鶺
 春雨の句に取りあへず脇付けて 幽雪
 馬よりゆびを配る名山 水
 夕月の影ハ池水に円なり 鶺
 秋風に折る岸の松の木 雪

柳鶺と幽雪の関係は、すでに交流深い様子が他の記録で解っているが、軒水についてはおそらく江戸佐久間柳居門下で、柳鶺とともに大宮に招かれたのかとも想像できる。

客人軒水の新春正月の寿ぎと、幽雪・柳鶺へ、大宮郷への挨拶の発句が立てられ、「土器焼も」に深々とした辞儀が込められている。

土器は、お祝い事に、事ある毎に使われ処

々で焼かれていたようである。秩父焼のはしりであろう。「客人もてなせ、幽雪よ」と含みを持たせた柳鶺の脇句から、幽雪との深々とした交流が伺える。軒水の四句目の内容から推してみると、この三人は、何らかの形で大宮郷を散策している様に見える。

「馬よりゆびを配る名山」の「名山」や、柳鶺の五句目「夕月の影ハ池水に円なり」の「池水」。現在、大宮（秩父）の里山として親しまれている武甲山（一三〇〇メートル・石灰岩採掘のため山容も大分変わっているが）は、古くから日本武尊東征伝説、また甲山、武山とも呼ばれ、万葉の歌にも名山と詠まれてきた事から、軒水の句の「名山」は武甲山であろうし、また武甲山麓に、当時からある灌漑用池（姿の池）が「池水」であろうと推察できる。

三人それぞれ交友の思いが、屠蘇を酌み交す中に醸され、おっとりとした、大人の風格の漂う序章、表句となっている。これが初発の感想である。

挨拶で始まる表六句から連衆の心映え、雰囲気、読む者へ心情として伝わってくる。現在も連句大会等の折、会場付近の吟行散策が、日程に組まれ、その地の風物等に接することができ。そのような時、初めての人達との座も共通話題が持て、打ち解けた和の中の六句構成が生まれたりもする。

さて、読みに戻って続猿蓑集巻之上元禄七

年春推定作の表六句も眺めてみたい。

八九間空で雨降る柳かな 芭蕉
 春のからすの鳥ほる声 沾圃
 初荷とる馬子もこのみの羽織きて 里圃
 内はどさつく晩のふるまひ 馬
 きのふから日和かたまる月の色 沾
 狗背かれて肌寒うなる 蕉

「八九間空で雨降る」と、視覚に当季を感じ得し「柳かな」と、若柳の枝を配した二句一章の句だけに読者の目を留めさせる。「八九間空で」の意表をつく措辞から、「何だろう」と、読み下すと「雨ふる」「柳かな」となり景状の振幅を深め、さらに脇句によって、はつきりと田園風景に展開され、春耕へ、陽春へ向かう兆しが読み取れる。「初荷」「羽織」、四句目と目を移していく過程に、発句脇句の世界を倍増する明るさと、活気が加わって読者に伝わる。五句目「月」「日和かたまる」により、更に、めでたさ、明るさの雰囲気の流れに見える運び。これを芭蕉さんは六句目で切って見事な転じを見せている。

以上初発の読みの感想である。

去来抄に、「一卷・表は無事に作すべし（略）」とある。表現構成への心構えである。これを理解活動としての読みにもどいていうとすれば「一卷・表は無事に読むべし」となるのか。古俳諧の読み進みは難解な面が多い。

事務局便り

捌きをすれば連句に三回の味わいがある。

運座の場では連衆それぞれの発想や心情の流れがあることがうかがわれる。さすがと思うことも、どう付くのかと分りかねる事もあるが、連衆の一人として進行に与かるときとは違った角度から一卷をウオッチするという別段の感覚がある。

満尾して校合に移るとやたら欠点があるように思えてきてなんとかしたい、直したいとの誘惑にとらわれる。このため冷却時間をとってから全体を眺めるようにする。

加筆して印象が良くなる場合は少ないが、どうしようことうしようと逡巡する、このむずむず感が不思議な気分である。

校合後の清記を連衆に送ると返事が来る。来ない場合もある。校合ではもたもたして旬日を経たままうくせに返事はすぐに欲しい。勝手なものである。褒められると嬉しいが少しは叱って貰いたいという、バランスが微妙に揺れるのは本当にこれでもいいのかと不安があるのである。連衆の方は是非とも捌きに対し歯に衣させぬ叱咤激励を与えて貰いたい。私にとつては一粒三百メートルならぬ三度愉しめる連句である。

◇入賞おめでとうございます。

第十九回国民文化祭 福岡県苅田町

苅田町長賞

中林あや 「途中下車」

苅田町実行委員会会長賞

二村文人 「冬銀河」

◇新入会員紹介

細川晴子 (横浜市)

横井士郎 (小金井市)

花崎泰雄 (練馬区)

◇故明雅先生墓参会計報告

収入 計十六万五千円

会費 一人 四千円×四十名

諏訪欣二様より五千円

支出 計十六万三千九十円

供花他 四千九百九十円

御斎 十四万八千八百円

倉本様へ謝礼 一万円

残額は猫養会へ入金

◇描襲会発展基金に

ご協力有難うございました。

亀戸天神社

小出きよみ様

朱鷺の会 橘文字様

一万円

一万円

一万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

普通3376045猫養会基金

◇猫養会四月例会予定

日 平成十七年四月二十五日(月曜日)

時 午前十一時より

奉納正式俳諧興行

場所 亀戸天神社

◇描襲作品集第十五号は四月末発行の予定です。

お申し込みは、バックナンバー共

☎277-0051

柏市加賀二二二一

☎・FAX 〇四一七二七二八二一九

梅田利子 まで

訂正とお詫び

前号で文字の誤りがありました。ここにお詫びして訂正致します。

十四頁 「夏手前」――「夏点前」

季刊 『猫養通信』第五十八号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二二二一―十六

編集人 橘文字 棚町未悠 林鐵男